

福武教育文化振興財団フォーラム

「ここに生きる、ここで創る」

—地域は文化を求めているか—



福武教育文化振興財団では、文化芸術活動をさらに効果的に展開し、地域の発展につなげていただくために、鳥取県の中山間地で廃校を劇場として全国的に活躍している「鳥の劇場」芸術監督・中島諒人氏を招き、1月9日、ルネスホールにおいてフォーラムを開催しました。前半は、「鳥の劇場」の組織づくりや取り組みについて中島氏が基調講演。後半は、地域の舞台芸術の環境づくりに取り組んでいる大森誠一氏(NPO法人アートファーム代表)と「本づくりはまちづくり」を掲げて出版活動を続けている山川隆之氏(吉備人出版代表)が加わり、地域づくりに対するそれぞれの想いを語りました。

トークセッション「暮らしているからこそできる、まちづくり」 中島諒人×大森誠一×山川隆之

—地方と東京について

山川 今日の大きなテーマの一つ「地域」を考える時に、「中央」という大きな壁にあたる。日本の出版社は、8割東京に集中している。東京の出版社は、読者は全国にいるという前提で作っているが、地方出版社の場合、基本的に県民くらいの読者層。その人数的な面の違いがある。

中島 東京は、全国区だから1億2000万のマーケットだが、実は東京の演劇人口はおそらく10万人から20万人程度。そうした時に、東京で10万人、20万人相手の商売をするのと、鳥取は人口最小限だけでも19万人がいる。僕の中ではマーケットの大きさは同じだし、そういう人たちとどういう関係を結んでいくかの方が面白いなと思っている。

—文化芸術活動を地域で続けていくために、地域社会に対して望む客観的な要因は？

中島 舞台芸術の理解が深まるとか、学校教育や医療の現場に演劇を取り入れてほしいとか希望はあるけれども、演劇が持つ力の可能性を信じて、出来る限りのことをやってみんなに来てもらうだけと思っている。

大森 芸術活動を続けていく過程で、舞台芸術を社会化するためにNPOを設立し、公共のことを考えるようになっていった。文化施設にしても行政が作ったからと言って、公共の場と断言はできないと思う。いかに公共的な資源として活用できるかが重要だと思う。

山川 地元のことを記録して次世代に残していく、県外に発信していく出版という装置を持っているのに、地域の中で使いこなしてないというもどかしさを感じている。出版という行為が自分たちの持っている有用性だと知ってもらい、使いこなしてほしい。そこは地域を変えていきたい一つのポイント。

中島 東京と地方の関係がよく言われるが、僕は暮らしているここが世界の中心で、ここで生きている、ここで創るということがすごく大事だと思っている。紙で記録を残していく、ここに生きた人たちの何かが記録されていくことは、すごく意味のあること。

—住んでいるからこそできることは？

中島 評価のシステムが東京中心なので、偉い先生は誰も見てくれない。ただ、ここでよく感じるのは、いろんな人に会えること。東京にいと日常は演劇人にしか会えない。例えば、少し前に、お医者さんに学会でクオリティ・オブ・ライフの問題を考えるようなお

まちを劇場空間にして

Seiichi Omori

大森誠一

プロデューサー、NPO法人アートファーム理事長。1950年岡山市生まれ。フリーランスの編集者兼ライター。の傍ら、92年以降「岡山河畔劇場」「劇ぶれす」「岡山舞台芸術ゼミナール」演劇ユニット「水蜜塔」などを創設。創造・育成・鑑賞・交流事業を通じて地域の舞台芸術環境づくりに取り組むとともに、県内外の自治体や公立ホールの自主文化事業やアーツフェスティバルをプロデュース。



芝居をしてくれないかとお願いされた。小さなコミュニティの中でいろんな人に出会いながら仕事をすることは、より本質的な仕事ができるのかなと。

大森 1993年から始めた河畔劇場は、岡山ならではの劇場空間を生み出していこうという意味では、ここでしかできないと思う。地方と東京とか都市と田舎という対立軸で自分たちの活動を決めていくというのは意味がなくて、ローカルにこだわるのがローカルを超えるという、ローカル＝インターナショナルという、そういう視点をどうやって見つけていくか、岡山の中にも普遍的な世界につながっていくような場所とか地域、それをどうやって発見して作品にしていくかを大切にしている。

山川 岡山で作ったものを全国で売れるような本にしたいと思っていたが、ことごとく失敗した。その教訓から、ここ5年ぐらい、地域の人に読んでもらえればいいというスタンスで本を作っている。そう思いながら作った美作市英田地区の棚田再生の本は、一地域の抱えている問題だが、全国共通の抱えている問題であり、北海道の人も沖縄の人が読んでもいい本。地域のことを掘り起こして、地域のことを考えた結果、それは結局、意図しなくてもグローバルなテーマになった。

—今回のサブタイトル「地域は文化を求めているか」について、どのように考えますか？

中島 地域という言葉はあいまいな意味に使われることが多いが、地域というのは「ここ」だと思う。ここには私しかいないわけで・・・私は芸術が愛好される社会になってほしいとか、私は芸術が尊敬される社会になってほしいとか。地域とは「私」の集合体であって、文化を求めているのは、私であるということ

は確信を持って言える。

大森 社会のためとか、まちづくりのためとかを前提に活動しているわけではなくて、結果的にまちづくりとか社会に貢献できればいいなと思っている。創作活動でも、そういうスタンスに尽きると思う。

山川 タイトルを考えた一人として、これは自分自身への問いかけ。自分がやっていることが社会で必要とされているかを問いかけながら仕事をしている。「地域が文化を求めている」という社会を作るために日々活動することが自分の仕事であるということを感じている。文化のない、市場原理で成り立っている地域社会ではさびしいと思うし、豊かな地域というのは、文化を支えられる地域だと信じている。



Photo all by ; Koutarou Miyake



Makoto Nakashima

暮らしているここが世界の中心

中島諒人

演出家、鳥の劇場芸術監督、「鳥の演劇祭4」プログラム・ディレクター。1966年生まれ。90年東京大学法学部卒業。大学在学中より演劇活動を開始、卒業後東京を拠点に劇団を主宰。2004年から1年半、静岡県舞台芸術センターに所属。2006年より鳥取で廃校を劇場に変え、「鳥の劇場」をスタート。二千年以上の歴史を持つ文化装置＝演劇の本来の力を社会に示し、演劇の深い価値が広く認識されることを目指す。芸術的価値の追究と普及活動を両輪に、地域振興や教育分野にも関わる。

文化を支えられる地域に

Takayuki Yamakawa

山川隆之

編集者、吉備人出版代表。1955年岡山市生まれ。三重大学農学部卒業。伊勢新聞記者、生活情報紙「リビングおかやま」編集長を経て95年に株式会社吉備人を設立。『絵本のある暮らし』『岡山人じゃが』『のれん越しに笑顔がのぞく』『愛だ!上山棚田団－限界集落なんて言わせない!』などの編集を担当し、吉備人出版としてこれまでに17年間、約400点を出版。

